

小野小町伝説における遊女像

林 怡 伶*

はじめに

六歌仙として名を馳せた小野小町は、古代末・中世を通じて、歌物語における歌人としてだけでなく、様々な説話において恋多き好色女として、さらには遊女としても描かれるようになる。

小稿は、諸先学の研究を参考にし、かかる小野小町の伝説から遊女像の生成及び当時の人々の遊女観について検討するものである。

1. 伝承中の小野小町

小野小町にまつわる伝承は少なくない。その理由について前田善子氏が①伝記が未伝であること、②美人であること、及び③優れた歌人であり、④一生を不幸のうちに終わったと推定されるという四点にまとめた。ゆえに後人の興味を引き、数々の伝承が生まれたと考えられている。さらに前田氏は小町の伝説を①美人流浪伝説、②美人驕慢伝説、③美人好色伝説、④歌人伝説の四種類に分類している¹。

この前田氏の分類は、現在でも小町説話を整理する際の基準となっていると思われるが、この内、小稿では、小町と遊女との関連性を示す史料、美人好色伝説、特に小町遊女伝説にかかわる物語に検討の範囲を限定し、今回はその基礎作業として、これまでの諸先学の研究を検討した上で、今後の自身の研究の方向性を示しておきたい。

それではまず、遊女としての小町像の具体相を把握しておきたい。次の諸史料(抜粋)は遊女小町像に関する代表的なものである。

①女答予曰：「吾是倡家之子、良室之女焉。壯時
驕慢最甚、衰日愁歎猶深。…(略)」

(平安時代後期・「玉造小町子壯衰書」)

②小町は馬頭観音の化身なり。井出寺にて死とい
ふ事は一旦の事歟。其後衰弊して相坂の辺にて
かばねをさらすと見へたり。

(鎌倉時代・冷泉流『伊勢物語抄』)

③かの業平、馬頭観音として、この事を案じ給ひ
て、小町はおなじく菩薩如意輪観音の化身とし
て、ともに議し給ひて、…(後略)

(鎌倉時代・『和歌知願集』)

④いたはしやな小町は、さもいにしへは遊女にて、
花のかたちかゝやき、かつらの眉墨青ふして、
白粉を絶さず、羅綾の衣おほふして…(後略)

(室町時代・謡曲「卒都婆小町」)

⑤ i そもそも、清和の頃、内裏に、小町といふ、
色好みの遊女あり。…(中略)古の衣通姫の
流れとも申し、観音の化身とも申し、…(略)
いたづらに月日を送り給ふことを悲しび、色
好みの遊女と生れ、…(後略)

ii また、小町は、男に逢ふこと、まづ千人と
記したれども、逢うて逢はぬとも見えたり。
…(後略)

iii 「(在原業平) 古の色好みの小野小町は、こ
れにわたらせ給ふか」

iv 「(小町) よくよく思へば、同じ色好みの、

*台湾国立政治大学大学院院生

情けもことに在原の、おもかげは業平の、あら恥づかしいわが姿…(後略)

v 「(小町) その歌人の色にふけりしこと、数を白玉の、手に取る文の数あまたありしかども、……(後略)」

vi 「(業平) われも心を移し、身を捨てて、色好みは、数を知らずあひ馴れしかども、その中にも、思ひとめしはわづかなり。…(中略) みづからも、千人と記したり。これみな偽りの情なり。…(後略)」

vii この物語を聞く人、まして読まん人は、すなはち観音の三十三体を造り、供養したるにも等しきなり。小町は如意輪観音の化身なり。また業平は、十一面観音の化身なり。あだにもこれを思ふべからず。南無大慈観音菩薩と、回向あるべし。

(室町時代・「小町草紙」)

最初の①「玉造小町子壮衰書」は平安時代後期に成立したといわれる²。生没年が平安時代前期と推定される小町にとって、これは最初に彼女に関連する作品と言えよう。

この作品に登場する倡家之子とは倡女、つまり遊女のことを言う。この物語の主人公が小野小町とは明白に示していないが、彼女の物語として読みつがれている。従って、平安時代後期以降に小町を遊女視する傾向が生まれたと考えられる。

この「玉造小町子壮衰書」以降、小町の遊女としてのイメージは強くなり、定着していくことは、室町期の史料から明らかである。

本稿では、これら史料から窺える遊女小町像の内、「色好み」譚と「観音菩薩変化」譚に注目する。それは両者が小町を遊女たらしめる最も重要な構成要素となっていると思われるからである。

2. 「色好み」について

「小町草紙」にある「内裏に色好みの遊女あり」

について、佐々木孝二氏は論文「御伽草子「小町草紙」論」にて、中世の人は当時の宮廷の女房たちの生活実態を明確に把握ができず、日頃華美な服を着て遊宴に侍りや王公貴族と浮き名を流すといった生活が遊女の生活形態と重なる部分があるので、「内裏に色好みの遊女あり」という架空のイメージが生まれたと解釈している。

今関敏子氏は論文「〈色好み〉の流浪」にて、「小町草紙」の「また小町は、男にあふこと、まづ、千人とするしたれども」の記載から、色好みについて、多くの相手と契る、剥き出しの欲望に従う放埒な性関係という意味であると論じる。

同じく松田修氏も「遊女百科 聖と俗のデュアリズム」にて、「逢うて逢はぬ」というような表現は逆説的レトリックで、日本性愛論の常套と論じる。つまり、小町は業平と同じく「千人」の相手と関係を持ったと位置づけている。

それでは次に、これら諸先学の研究に対する、私見を述べたい。

まず、佐々木氏の見解については、遊女をもと朝廷に属する職能民であるとする網野善彦・後藤紀彦両氏の説とのかわりを指摘しておく。平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての皇族であった守覚法親王(1150-1202)の著した『右記』の管絃音曲について述べた条に「或倡家女白拍子皆是公庭之所屬也」とある。記主の守覚法親王の父と言え、今様狂で知られる後白河天皇である。後白河天皇は十歳から今様を習い始め、退位して院となって、五十歳の頃に『梁塵秘抄』を編纂したことは周知のことである。後白河院は三十一歳の時、今様の名人・傀儡女の乙前を参内させ、彼女が死ぬまで優遇したと言われる。年代でも、このことを踏まえると「小町草紙」の時代設定たる清和の頃(在位858-876)に、内裏に遊女がいることは想定可能であろう。但し、このことを「小町草子」の受容層が認知していかどうかはまだ検討の余地がある。

次に今関氏と松田氏の説について。両氏が「色

好み」の意味を解くための史料は、⑤のii「又小町は、男にあふこと、まづ、千人としるしたれども、逢うて逢はぬとも見えたり」の箇所である。この「逢うては逢わぬ」の意味について、私は「小町草紙」の別の部分を採って論拠にするほうが適切だと考える。物語中、小町が自らの住む草庵を訪ねてきた在原業平に対して、「よくよく思へば、同じ色好みの、情けもことに在原の、おもかげは業平の、…(後略)」(⑤のiv)と自ら業平と同じく色好みと認めているが、この小町と同類とされた業平が、後に彼の「色好み」を懺悔に記述している箇所に注目したい。「われも心を移し、身を捨てて、色好みは、数を知らずあひ馴れしかども、その中にも、思ひとめしはわづかなり。…(中略)みづからも、千人と記したり。これみな偽りの情なり。」(⑤のvi)とあるのである。このことから、この「逢うて逢はぬ」とは、小町の側に引き寄せて考えてみれば、小町は多くの男と関係を持ったけれど、その多くは意に添わぬ多くの相手との行為であったという意味となる。ここからは、小町が自分の性欲や恋愛感情を満足させるために多くの男と関係を持ったのではなく、彼女を求めてくる男たちのために奉仕した、つまり自己犠牲を伴う利他行為を実践していたという解釈が可能となつてこよう。

3. 観音菩薩の変化について

先に掲載した史料には、小町を観音の化身とする一節があった。このことについて、まず各氏の見解を整理しておきたい。

佐々木氏によると、中世仏教における、菩薩が人々を導くために、苦悩を体現するという構想がこの物語に見られるとされる。

濱中氏によると、中世に至って、歌人側からの歌仙小町への崇敬心及び色好みの小町への仏教側から提起された落魄説話の流布が融合して、小町菩薩説が誕生したとする。そして小町が観音の化

身として設定された時、少なくとも伝承文学の観点からすれば、その乞食・非人としての姿は、むしろ彼女の菩薩としての聖性を保障する苦行の姿として捉えるべきであると論じる。

私には、これら諸説を本格的に検討する余裕がない。そこで今回はこれを準備する作業として、観音変化譚の形成過程との関連から検討を加えたい。

まず、観音変化譚を検討する前に確認しておかねばならないことは、研究史においてあまり注目されてこなかったが、その前史として遊女成仏譚が先行するという点である。

「玉造小町子壯衰書」において小町が最後に仏道に帰依するとあるように、遊女に関する説話にも遊女と仏教の上人との対話を載せ、遊女が和泉式部の歌を歌って聖との結縁を願い、罪業深き身から救いを求めたとする物語(鴨長明『発心集』)や、法然上人の説法により室の遊女が仏門に帰依した(『法然上人行状絵図』³、『法然上人伝全集』⁴)という遊女教化(成仏)譚が少なからず見られる。

具体的に成仏譚の内容を紹介しておこう。『法然上人行状絵図』によると、建永二年三月十六日に法然が配流先の讃岐国へ向かう途中、室津の港で遊女が舟で追いかけてきて、「…(前略)、世をわたる道まちまちなり。いかなるつみありてか、かかる身となり侍らむ。この罪業おもき身、いかにしてかのちの世たすかり候べき」と問いかけてきたという。これに対し、上人は「…(前略)、もはら念仏すべし。弥陀如来はさやうなる罪人のためにこそ、弘誓をもたてたまへる事にて侍れ。ただ、ふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ。本願をたのみて念仏せば、往生うたがいあるまじき」と教えた。遊女は法然の言いつけを守り、近くの山里で只管念仏を称え、往生を遂げたという。

次に『発心集』によると、室の泊の遊女が舟を漕ぎ着け聖のもとへ向かい、和泉式部のかつて性空上人と結縁のため送った和歌「暗きより暗き道

にぞ入ぬべき遙かに照らせ山の端の月」を歌って、結縁を願ったという話が載せられている。深い闇に迷い込んだ遊女が仏教の教えを月光に例え、その光こそ聖であると思い、浄土への回向を聖に託したのであろう。

さて、このような成仏譚に混じり、観音変化譚が出てくるわけであるが、それは何時ごろのことであったか。

下の図を見ていただきたい。関係諸史料を成立年代順に並べてみると、遊女成仏譚よりも観音変化譚が後発であることが改めて確認でき、さらにそれが鎌倉期以降であることが窺える

書名	成立年代	関連説話の性質
『梁塵秘抄』	1180 前後	成仏
『法然上人行状絵図』巻34	建永2年(1207) ⁵ 3月16日	成仏
『発心集』	1216 以前 ⁶	成仏
『古事談』	1212-1215 の間に	観音化身
『十訓抄』	1252 成立	観音化身
『撰集抄』	1264-1275 頃までに	観音化身

女性が観音菩薩の変化であったとする物語は、すでに平安時代前期に成立した『日本霊異記』から知られるところである。西口順子氏の検証によると、菩薩が女性に化して人を救済する物語は遅くとも十二世紀に明確な形で存在したことが指摘されている⁷。遊女の観音変化譚が女性のそれに比べて十三世紀成立と遅れて成立することについて、現在確たる論拠を示すことができないが、やはり、当時の遊女に対する卑賤や罪悪のイメージが強すぎて、遊女を観音菩薩の化身とすることに抵抗があったという事情を想定した方がよいかもしれない。観音変化譚に先行する遊女成仏譚が遊女観音変化譚を可能にするための下準備となった可能性もある。

また、遊女観音変化譚の形成に関して、見逃してならないのが、これに先行して、僧の相手をする女性が菩薩の変化であるとする物語が登場していることである。その具体例として、親鸞が建仁元年(1201)に六角堂で救世菩薩の示現を蒙って

得たとされる偈を次に示そう。

(前略)

善信言

行者宿報設女犯

我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴

臨終引導生極樂

(『親鸞夢記』、『親鸞伝絵』)

偈の内容を簡単に示すと、修行者が前世の果報にして戒律を破り、女性と性的関係を持つことになっても、菩薩が高貴な女性(玉女)に化身して代わりをつとめ、僧を救済するという、観音変化譚が説かれている。

かかる僧の相手をする女性の観音変化譚も、遊女観音変化譚の形成に大きな影響を与えていると思われる。

おわりに

本研究では、遊女小町像を構成する「色好み」と「観音菩薩変化」について検討した。「色好み」については、「逢うて逢はぬ」の解釈を深めることで、相手を選ばず、求めてきた相手の要求に応じ、偽りの情で、愛を施すという遊女像が見えてきた。伝説の中で醜悪な老女として描かれている遊女小町は、千人とも言われる男たちの要求を満たしてきた者の姿であった。これを単なる悪女として評するわけにはいかないであろう。

この遊女小町像と遊女を観音菩薩の化身とする観音菩薩変化譚とは、お互いに響きあう関係にあるように思われる。多くの男たちのために身を犠牲にしてきた遊女小町と多くの人々を仏道へ導き救済する観音菩薩とはそのイメージが重なり合う。おそらく遊女小町像を受容した人々にとってもそれはある意味、想像可能な事柄だったのでなかっただろうか。

また本研究では、この遊女観音変化譚に先行して遊女成仏譚があることも指摘した。そして、この成仏譚が先に受容されることで、すでに平安前期からみられた女性観音変化譚が遊女にも適用されるようになったのではないかと推測した。これはまだ検討を要する課題である。

最後に指摘しておきたいのは、遊女観音変化譚が成立した意義である。これに先行する成仏譚と異なる点は、成仏譚が遊女の罪悪を功德によって滅罪し救済を説く内容であるのに対し、観音変化譚が遊女の罪悪を観音変化の主因としている点である。すなわち前者が遊女という存在を否定しているのに対し、後者は遊女の社会的価値を必要悪として肯定しているのである。この違いは大きい。先に色好みの解釈にて指摘した、相手を選ばず偽りの情で愛を施すという遊女像と考えあわせるなら、この観音変化譚は遊女の生業が苦を伴いながらも、一個の社会分業として認識されたことを示していると思われる。

註

- 1 前田善子(1943)『小野小町』三省堂、細川涼一(1989)。
- 2 細川涼一(1989)、渡辺秀夫(1983)「小野小町愛の地獄—「玉造小町子壯書書」『国文学：解釈と教材の研究』28巻9号。
- 3 中村直美(2008)「遊女考—『法然上人行状絵図』・『和漢朗詠注』—」『佛教大学大学院紀要』36号。
- 4 中井真孝(2004)「法然諸伝に見える遊女教化譚—『行状絵図』と『九卷伝』の前後関係—」、宮林昭彦教授古稀記念論文集『仏教思想の受容と展開』第1巻、山喜房佛書林。
- 5 『法然上人行状絵図』の成立年代は徳治2年(1307)より10年かけて完成と推測されているが、ここでは法然上人が遊女を救う日付を示しておく。
- 6 『発心集』は鴨長明(1155-1216)晩年の編著とされるため、ここでは1216年以前と示しておく。
- 7 西口順子(1998)。

参考文献

- 赤羽根龍夫(1987)「「小野小町」考」『基礎科学論集：教養課程紀要』5、神奈川歯科大学。
市古貞次校注(1958)『御伽草子』岩波書店。
今関敏子(1996)『〈色好み〉の系譜—女たちのゆくえ』

世界思想社。

- 今関敏子(2002)「〈色好み〉の流浪—小野小町の運命」『文学』3巻1号、岩波書店。
大島建彦校注・訳(1992)『御伽草子集』小学館。
大和岩雄(1993)『遊女と天皇』白水社。
小田幸子(2011)「小野小町変貌—説話から能へ—」『日本文学誌要』84号、法政大学国文学会。
小峯和明(1995)「中世説話の小町」『国文学解釈と鑑賞』60巻8号、至文堂。
佐伯順子(2003)『遊女の文化史—ハレの女たち—』中央公論新社。
平雅行(1998)「旧仏教と女性」『日本女性史論集5 女性と宗教』、吉川弘文館。
西口順子(1998)「成仏説と女性—「女犯偈」まで—」『日本女性史論集5 女性と宗教』、吉川弘文館。
濱中修(1996)「『小町草子』 乞食と菩薩」『国文学解釈と鑑賞』61巻5号、至文堂。
細川涼一(1989)『女の中世 小野小町・巴・その他』日本エディタースクール出版部。
松田修(1978)「古代—近世 聖と俗のデュアリズム」『国文学：解釈と教材の研究』23巻4号、学灯社。